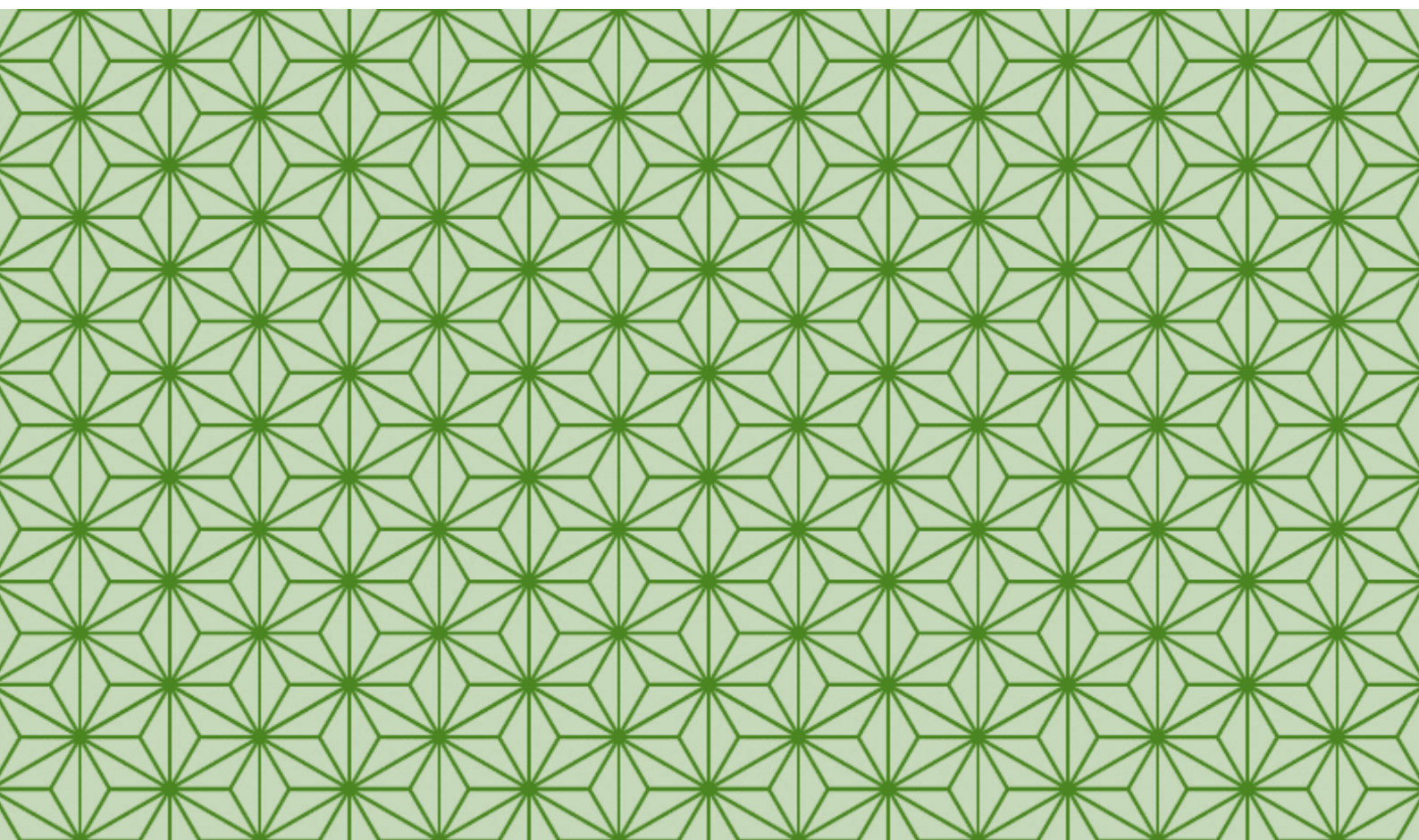


せんぐう館 平成 28 年度企画展示

なつそひく — 麻 —

期間 平成 28 年
7/1 [金] ~ 9/26 [月]



開館時間 9時～16時30分
お問合せ 式年遷宮記念せんぐう館
〒516-0042
三重県伊勢市豊川町前野 126-1
TEL.0596-22-6263
<http://www.sengukan.jp/>

ご挨拶

「なつそひく」とは『萬葉集』に見える枕詞まくらことばです。麻あさは夏期に収穫するので「夏麻」と形容され、「夏麻を引いて績うむ(=麻の皮を剥いで糸を紡ぐ)」もしくは「夏麻を根引くうね畝(=麻畑の畝から麻を引き抜く)」の意から、同音の地名「海上うな瀉かみがた」と「宇奈比うなひ」にかかります。また「命」にもかかる枕詞です。麻は日本人の日常生活に欠かすことのできない植物であり、生命を繋いできました。わが国の歴史や文化、気候風土を知るための重要な鍵といえます。

伊勢神宮を始め全国の神社では、麻を重要なお供物として神前に奉るとともに、神宝や神具の調製にも使用するなど祭祀の根幹をなす産物でもあります。

今回の企画展示では、主に伊勢神宮と麻の関わりを紹介して、わが国の麻の歴史を紐解いていきます。展示資料から知り得る様々な情報が、身のまわりの生活や産業のあり方を再発見するきっかけとなり、また地域の中核にある神社に寄り添うお気持ちに繋がることを願います。

平成 28 年 7 月 式年遷宮記念 せんぐう館

目次

ご挨拶

- 1 麻とは何か
- 2 麻の日本史① — 斎部氏と麻 —
- 3 麻の日本史② — 経済価値の高い苧麻 —
- 4 神宮と麻
- 5 神社・神道と麻
- 6 神宮の神札は「神宮大麻」
- 7 御装束神宝と麻

凡例

☆この図録は平成28年7月1日から9月26日にかけて、せんぐう館で開催する企画展示「なつそひく—麻—」に際して作成したものである。

☆図録の資料図版の順は、展示順序を示すものではない。

☆各ページの背景は「麻の葉文様」といいわが国で古来から使われている装飾文である。

☆本書の編集・執筆は深田一郎があたった。

参考文献

千葉県神道青年会『神さまと麻のおはなし』平成26年

柳田國男『木綿以前の事』昭和54年

「今から始める大麻栽培 無毒大麻を産業に活かす」『月刊 農業経営者』平成24年9月号

国税庁ホームページ「中世の青苧と座」

神宮広報シリーズ(四)『神宮の和妙と荒妙』神宮司庁広報課編

木本雅文「神宮のお神札(神宮大麻)について 頒布大麻と授与大麻の違い」平成27年『瑞垣』232号

福島県昭和村ホームページ「からむし織について」

月ヶ瀬奈良晒保存会ホームページ

1 麻とは何か？

わが国で「麻」といえば古より「大麻^{たいま}」のことをいいます。大麻の茎は繊維が強靱なため縄や網などに加工し、実は食料として日常的に使われました。しかし花冠^{かかん}や葉に幻覚作用を引き起こす成分が含まれることから、現在では原則的に世界中で栽培や使用が固く禁じられています。わが国でも昭和 23 年(1948)7 月に施行された大麻取締法で厳格に規制されており、違反の場合には罰則も設けられています。そのため「麻」という品名で流通している繊維は苧麻^{ちよま}(ラミー)と亜麻^{あま}(リネン)のことで、実は発芽しない様に加熱処理をしたものが食用として認められています。近年は大麻繊維の衣料品が「ヘンプ」という品名で流通し、またバイオ燃料や医療分野で利用できることが注目されていることから、わが国でもこうした産業用大麻の栽培について各地で議論や研究が始まろうとしています。今回の展示では「麻」と表記するものは「大麻」を指すものとします。



大麻

一方で、苧麻・亜麻・黄麻(ジュート)など繊維を採る植物も「麻」として
広くとらえていますが、植物学ではいずれも別の種に分類されています。中
でも苧麻は和名を「カラムシ」といい「紵」「青苧」「真麻」とも表記されます。
苧麻の繊維は貢納用の上質な衣料や紙を得るため古代から全国で栽
培・加工され、庶民の普段着としても使われました。江戸時代に入ると木
綿の普及により苧麻の生産量は減少しましたが、上質な繊維は「上布」や
「縮」として商品価値を高め、地域を支える産業として維持・発展しました。
また北日本では冬に雪が降る低温多湿な環境であり、撥水性に優れた
外套として引き続き重用されました。近年は海外から苧麻繊維を大量に
輸入しているため国内で栽培が続けられている場所は至極わずかです。



苧麻



亜麻



黄麻

2 麻の日本史①一齋部氏と麻

麻を使用した最古の痕跡は、福井県若狭町にある鳥浜貝塚の縄文時代前期(6,500～5,000 年前)にあたる地層で見つかっています。現在も残されている氏神様の御神名や字名に見る地域の古名、先祖代々のお名前から日本人と麻との浅からぬ縁を知ることができます。

千葉県は古くは総国といい、麻に関係する伝承があります。平安時代初期に齋部広成が著した『古語拾遺』(大同 2 年〔807〕成立)には、古代から続く齋部氏(かつては忌部氏)の由緒が記されています。

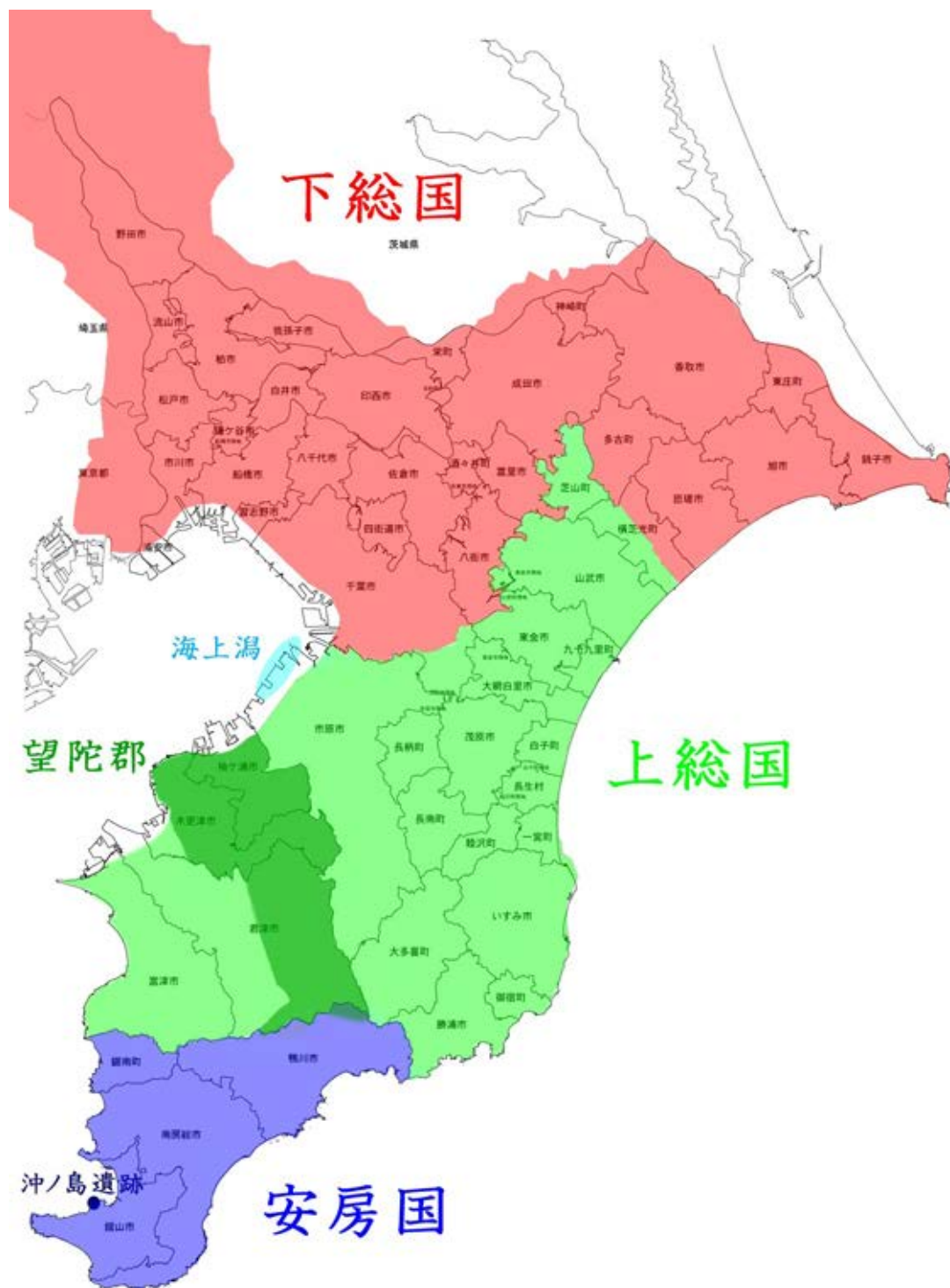
これによると、「総国」の名は朝儀に必要な麻の一大生産地であったことに由来することがわかります。この伝承は昭和 42 年(1967)に藤原宮跡で発見された7世紀末の木管に「上球国」との記述があり、「球」とは「房を成して稔る果実」の事で、麻の実は房状に稔る様を表していることや「球」も「総」も和訓では「ふさ」と読むことから強く裏付けされています。



齋部広成 (『前賢故実』より)

千葉県では 8,000 年前の縄文草創期の遺跡である沖ノ島遺跡(館山市)から国内最古の麻の種が出土しています。さらに律令制の時代には上総国望陀郡(現在の袖ヶ浦市・木更津市・君津市一帯)より徴された望陀布は最高級の麻織物として規定され、大嘗祭などの宮中祭祀や遣

唐使の貢納品に採用されていました。何より県内には齋部氏の祖神である天太玉命や天富命をお祀りする神社や、麻にまつわる祭礼や神事を今日に伝える地域が多数あります。夏麻引くに掛かる地名「海上潟」も上総国海上郡(現在の千葉県市原市付近)に比定されています。



また天皇が即位された後に初めて行う新嘗祭を踐祚大嘗祭と申し上げます。^{にいなめさい せん そ だいじょうさい}
大嘗宮に設けられる正殿に天照大神を始め、天神地祇をお迎えし、^{だいじょうきゅう}
その年の新穀を供してみずからも聞こし召す重要な神事です。祭場には東
西2箇所に正殿が設けられ、東を悠紀殿ゆきでん、西を主基殿すきでんと申します。

その神座しんざに神衣かむそとして奉る御料は麩服あたらえと申し上げる麻の織物です。麩服は現在の徳島県にあたる阿波国の忌部氏が奉織することが決められており、忌部氏人たちが御殿人みあらかんどとなって麩服神服あたらえかんみそが調製されます。平成2年(1990)11月に執り行われた踐祚大嘗祭では徳島県で麩服神事あたらえしんじが執り行われ、天日鷲命あめのひわしのみことをお祀りする忌部神社が中心となって現在に伝わる忌部氏の後裔が御殿人として麻を調えました。『古語拾遺』に記された古伝は今も受け継がれています。



忌部神社 (徳島県神社庁 HP より)

3 麻の日本史②—経済価値の高い「苧麻」

苧麻は、有史以前に他の地域からもたらされた原種が野生化した帰化植物とされています。その栽培と加工が始められた時期は明らかではありませんが、いわゆる『魏志倭人伝』には「禾稻(いね)・紵麻(からむし)を栽培し、蚕を飼い桑を植えて絹糸をつむぎ、麻布・絹布を産出する」とあり、絹とともに早くから繊維として加工されていたことがうかがえます。

そして『日本書紀』には

——持統天皇七年(693)《中略》^{ひのえうま}丙午の日(3月17日)、詔して、天の下をして桑、紵、梨、栗、^{かぶら}蕪菁等の草木を^{すす}勧め^う殖^うゑて五穀を助けしめたまひき

と記されており、はじめて神宮式年遷宮が行われた時代に、日常生活で主要な五種類の穀物(『日本書紀』では^{あわ}稲・^{ひえ}麦・粟・稗・豆)を補う作物として苧麻が栽培されていたことが知られます。苧麻は麻に比べて細く柔らかい繊維が採れることから、上質な布を織ることができる商品価値の高い作物として栽培・流通が拡大していきました。中でも飛躍的な発展を遂げた地域のひとつが^{えちごのくに}越後国(現在の新潟県)です。正倉院に収められている奈良時代の^{びょうぶぶくろ}屏風袋の裏地に使われた繊維が苧麻で、そこに「^{くびき}越後国^{ひなもり}夷守郷^{ひとのあさま}戸主肥人^{ろようぶ}苧麻呂庸布売段」の墨書が見つかったことから、同国からの^{こうのうひん}貢納品を材料に作られたことがわかりました。

また平安時代に編纂された法律の運用細則である『延喜式』(延長 5

年〔927〕撰進)には交易雑物(米・布以外の諸税として納められた品)として「越後国 商布一千端」が記載され、これが苧麻布であったとされています(卷廿三 民部省 下)。

中世になると苧麻を扱う商人たちは青苧座と呼ばれる同業者組合を形成して、公家の保護を受けながら流通・取引を独占しました。その主力をなしていたのが大坂・天王寺の青苧座であり、生産地である越後国府中(現在の新潟県上越市)、中継地である近江国坂本(現在の滋賀県大津市)、消費地である京でも座を形成しました。やがて生産地・越後の守

上杉謙信の最大版図



上杉謙信
月岡芳年画

護である上杉氏やその被官の長尾氏がこれらの座を支配し、その収益が後の戦国大名・上杉謙信の活動を支えたとされています。やがて上杉氏は陸奥国会津そして出羽国米沢へ国替えとなりますが、各地でも苧麻の栽培を奨励したとされています。国の重要無形文化財に指定されている越後上布や小千谷縮という伝統的な織物産業はこの系譜に連なっており、その原材料である米沢苧、そして現在は本州で唯一となる高品位な苧麻の生産地である福島県大沼郡昭和村の営みにも続いています。

4 神宮と麻かんみ そさい—神御衣祭

毎年5月と10月の14日に皇大神宮(内宮)とその第一別宮である荒あら祭宮まつりのみやで執り行われるお祭りが神御衣祭かんみ そさいです。天照大神に5月は夏の御料、10月は冬の御料として「和妙にぎたえ けんぶ」(絹布)と「荒妙あらたえ あざぶ」(麻布)、そして御絲みいと・御針みはりなどが奉られます。



荒妙

荒妙を奉織する場所は、松阪市井口中町いぐちなかまちに御鎮座する神麻続機殿かんおみはたどの神社じんじゃです。皇大神宮の所管社こうたいじんぐう しょかんしゃで、機殿の鎮守の神である神麻続機殿かんおみはたどの鎮守神ちんじゆのかみをお祀りしています。当社ではかつてこの地で荒妙を奉織した氏族おみ・麻績氏おやがみの祖神である天八坂彦命あめの や さかひこのみことが祀られたとも伝えられています。



神麻続機殿神社の杜



左：社殿 右：八尋殿

和妙を奉織する同市大垣内町おおがいとちように御鎮座の神服織機殿神社かんはとりはたどのじんじゃとともに両機殿神社はたどのじんじゃを含む櫛田川下流の東岸域は古来紡織業が盛んで、現在でも下御糸しもみいと・上御糸かみみいと・中麻績なかおみ・服部などの地名が見られ、地域の氏神様として服部伊刀麻神社はとりいとま・麻続神社おみがお祀りされています。

神御衣祭の斎行までには様々な準備が行われます。5月と10月の1日に和妙と荒妙を奉製する両機殿神社で神御衣奉織始祭が行われ、御衣がうるわしく織り上がるように祈念されます。

お祭りに続いて上旬には社殿右隣の八尋殿にて奉織作業が行われ、かつては「人面」、現在は「織子」と称する奉織工が携わります。奉織期間中は神宮の神職が参向して、作業の進捗を見守ります。

5月と10月の13日の朝、両機殿神社にて滞りなく奉織が出来たことを感謝する神御衣奉

織鎮謝祭が行われます。織り立てられた和妙と荒妙は内宮へ護送され、翌日の神御衣祭で天照大神に捧げられます。



織子による奉織



神御衣祭（参進）

5 神社・神道と麻

日本人が日常に使用してきた麻や苧麻は、神道では特別な神具として用いられます。神社では麻を「ぬさ」と読み、これは神前に捧げられる布や麻・木綿（楮を材料とする繊維。江戸時代に普及した木綿の材料は綿花）を総称した「幣」を「ぬさ」を読むことに由来します。わが国の法制であった



神嘗祭奉幣（参進）

「律令」には布帛類（ふはく）を租税として納めること（ちょう）が定められ、前述の望陀（もうた）布のように朝廷の儀礼で用いる貴い御料にもなりました。神様に捧げる食べ物以外の供え物を「幣帛（へいはく）」ということから、その素材となる絹や木綿そして麻が、ご神慮に適う御料の中心となるほど上質であったことがうかがえます。そして神前から下げられた供え物は神宿る「依り代（よしろ）」として尊ばれ、お下がりを用いてお祓いの神具やご祈祷のしるしである神札を調えるようになりました。それが麻の字をあてて「ぬさ」と呼び、大切に扱うようになった由来と考えられます。

おおぬさ おおぬさ
大麻(大幣)は神社で御祈禱を受ける時に、神職が左・右・左と振って
つみけが
罪穢れを祓う神具として知られています。一般的には白木の棒の先に麻



幹神の大麻



修祓

紐や紙垂しでを付けたものです。神宮で用いられる大麻は幹神みきさかき(幹に枝葉が
付いた神)に麻を付けています。また麻は神饌くくを括る紐、神職や神札の
奉製員をお祓いする祓具にも使われています。

6 神宮の神札は「神宮大麻」

ご家庭や職場の神棚に納めてお祀りし、日々手を合わせて天照大神の御神徳を仰ぐ神札を「神宮大麻」といいます。神宮の神札は、およそ 800 年前の鎌倉時代からお祀りされるようになり、かつては「御祓大麻」と呼ばれていました。現在、神宮大麻には「頒布大麻」と「授与大麻」があります。頒布大麻は全国の神社



関係者を通じて各家庭に届けられる皇大神宮の神札で、授与大麻は御祓大麻の伝統を受け継いだ神宮の社頭で受けることができる神札です。

頒布大麻は大麻修祓式(奉製した大麻・お守りなどをお祓いするお祭り)の祝詞で次のように奏上されます。

としごと ためし まにま あめのした よ も くに
年毎の例の任に天下四方の国の
まめひとり わかちくま おほぬさ つくりまつり
崇敬者等に頒布る大麻を製奉ぬれば…

天照大神の限りないご神徳を戴き、国民の心の拠り所としてお祀りするために奉製され、国の平安と全国のご家庭の無事が御祈願されています。

一方で授与大麻の祝詞は次のように奏上されます。

あめのした よ も くに まめひとり おほみや まあまう
天下四方の国の崇敬者等が大宮に参詣でて
たか たふと おほみ いつ あふぎまつ ひろ あつ おほ みめぐみ かたじけなみまつ
高く尊き大御稜威を仰奉り 広く厚き大御恵を 辱奉りて
こひまつ まにま さづけあた おほぬさ つくりまつり
請奉る任に授与ふる大麻を製奉ぬれば…

御参拝のしるしとして皆様が願いを込めて祈り、神様の御神徳を戴くための神札であることがわかります。神宮大麻はいずれも神宮司庁頒布部で奉製されています。

7 御装束神宝の調製と麻

御装束神宝^{おんしょうぞくしんぼう}は、式年遷宮に際し原則として国産の素材を使い、伝統的な技術で新たに調製^{ちようせい}されます。その中には多種多様な布帛類^{ふはくゑい}があります。「布」は麻や苧麻の繊維の織物、「帛」は絹繊維の織物を指します。麻や苧麻は、わが国の伝統的な品々を作るために欠かせない素材であることが分かります。ここでは当館で展示している「御装束神宝調製工程品」で使われている麻や苧麻の産地を紹介し、当地で伝えられてきた生産の技を解説します。

【麻】

神宝「^{あずさゆみ}梓弓」の弦（当室で展示中）

神宝「^{おんくら}御鞍」^{かわひもるい}ほか^{しん}革緒類の芯材（展示室3 で展示中）

当館で展示している調製工程品の麻素材は、群馬県^{あがつま}吾妻郡^{ひがしあがつま}東吾妻町の^{いわしま}岩島地区で栽培・生産されている「^{いわしまあさ}岩島麻」を用いています。岩島麻はおよそ 450 年前の天正年間に栽培が始まったと伝えられ、江戸時代には高級服地や一本釣りの糸、^{ゆづる}弓弦の素材に用いられました。上質な麻繊維は「^{じょうしゅうきたあさ}上州北麻」とも称され、岩島麻の名は最上級であることの代名詞でもありました。特に^{あさつる}麻弦製作を生業とする弦師は、各地で生産される麻のなかでも岩島麻の強靱さを高く評価しており、岩島の人々も弦師を最も上質な精麻を選ぶ目利きとして互いに認めていました。現在は技術保存を目的として 500 m²ほどの畑で栽培しているのみであり、最大でも年間 35kg 程度と生産量が極端に少なく、一般に出回ることはありません。岩島麻の特徴は上質な^{せいま}精麻を得る技術にありますので、その技を紹介します。

< 麻こぎ >

7月下旬頃、麻の成長と時期をみて晴天の日に行なわれます。良質の麻を選別して等級を付け、麻切り鎌を使い「根切り」「葉切り」を行い、束ねて一定の長さ(190cm)に切りそろえます。

< 麻煮 >

麻は一束にまとめられて麻釜で沸かした湯に入れて煮ます。これによって麻の組織を丈夫にすると共に害虫を駆除します。煮上げた麻は天日で10日前後干し、カビ防止のため2度目の麻煮を行い再び干します。

< ネド入れ >

皮を剥げるようにするために麻を発酵させる作業で、麻舟^{おぶね}に水を入れて朝夕2回水を浸した上で横に寝かせ、薦^{こも}を掛けて熱が逃げないようにして発酵を促します。8月下旬頃、乾燥させた麻を一日で麻挽き^{おび}が出来る分量だけ行います。

< 麻剥ぎ >

ネド入れの2日目あたりから麻に粘り気が生じるので、これを取り出して2〜3本ないしは4〜5本を束にして揃え、根本から10cm程度の処を折り、幹の皮を剥ぎ取ります。

< 麻挽き >

麻剥ぎしたものを麻挽き台に乗せ、麻かき^おと呼ばれる道具で不純物がまざる表皮を取り除きます。この作業で黄金色に仕上がった麻4枚ずつ8枚合わせて一結び(ひとかけ)にして、竹竿にかけて2〜3日陰干しをすると「精麻」となります。

【苧麻】

細布（さいふ・ほそぬの）

→殿内の敷設品^{ふ せつひん}

→神宝「御白馬形」に附属する口取人形の装束（これを褐衣^{かちえ}といい、素地は苧麻布を使用しています）

太布（たふ・ふとぬの）

→道敷^{みちしき}（遷御の道程^{どうてい}で敷かれる白布。展示室4の渡御御列模型を参照^{とぎぎよれつ}）

→一部の漆工品^{しっこうひん}で、下地となる布着せに用いる（展示室4で展示中）

国内最高品質の苧麻の産地は、先に紹介した福島県大沼郡昭和村です。昭和村では苧麻の栽培・収穫・生産を行ってきました。現在は「からむし織」の名で商品を製造していますが、一番の特徴は上質な繊維を生産する技術にあります。

<からむし剥ぎ>

苧麻は7月20日頃から8月のお盆までに収穫します。刈り取りは1本ずつ鎌を使って丁寧にを行います。茎から葉を落とし、尺棒と言う定規で一定の長さに切り揃えます。成長具合によって品質が異なるため、選別して束ねます。その後、皮を剥ぎやすくするため数時間から一晩ほど清水に浸し、1本ずつ丁寧に、皮を2枚になるように剥ぎ取り、一握りに束ねてまた清水に浸します。清水に浸すのは、皮を乾燥させないためと苧麻から出る青水(青汁)を流すためです。

<苧引き>

苧引き具で剥いだ皮の外皮を除き、繊維を取り出します。取り出したばかりの苧麻繊維は真珠のような光沢があります。その後2日ほど陰干して乾かし、100匁(約375g)にまとめて日に当てないように保管します。こうして出来た繊維素材を「原麻」といいます。

【製織の技】

精麻された麻や苧麻は奈良市月ヶ瀬地区で、「奈良晒」と呼ばれる工程を経て織物に仕立てられます。奈良晒の始まりは13世紀鎌倉時代にまでさかのぼるとされ、南都寺院で袈裟として使われていたことが記録にあります。さらに16世紀後期の安土桃山時代になると晒技法の改良に成功し、17世紀の江戸時代には幕府から「南都改」の朱印を受け御用品に指定されるなど、地域の伝統的産業として栄えました。奈良晒は主に麻を扱う製織技術ですが、各地の産業の衰退とともに技術が消えゆく中で、高い技量が認められ苧麻の製織も行うようになりました。

当館で展示している調製工程品の苧麻は「岩島の精麻を月ヶ瀬で晒したもの」です。ここでは月ヶ瀬で行われている製織の工程を3つに大別して紹介します。

< 苧績み >

- ① 真水と米のとぎ汁につけ柔らかくし、不純物を取り去る「ゆずき」をします。
- ② 陰干したあと「こく箸」という竹の管でしごいて原麻を細かくし、さらに爪で裂きます。
- ③ 糸車を使って指先で撚りながら糸を繋いでいきます。
- ④ 経糸づくりでは総という糸の束を作り、必要に応じて本数・長さ・張力を整え(整経といいます)、糊づけ、もじり入れの後に織機にかけます。

< 織布 >

緯糸は「へそ車」という独特の糸車で紡いで「へそ巻き」と呼ばれる紡錘を作ります。へそ巻きを終えた糸車を杼に収め、織機にかけた経糸の綾の間にこの杼を通して織り上げます。

< 晒し >

織り上がった麻布を生平といいます。藁灰で炊き、天日干しによる晒しを繰り返す、3月から4月にかけて草の上で干して真白く晒上げて仕上げます。